

専教寺報

浄土真宗本願寺派 一乗山 専教寺
〒714-1201 岡山県小田郡矢掛町矢掛2033
TEL. 0866-82-0488
URL. <https://www.senkyoji.com/>
E-Mail. senkyoji@senkyoji.com

題字 大橋曾水



ご挨拶

住職 釋 龍生

新年あけましておめでとうございます
今年もよろしくお願い申し上げます

作家の朝井リョウ氏の小説「正欲」の冒頭に、次の文が綴られている。

たとえば、街を歩く

すると、いろんな情報が見界に飛び込んできます。(中略)

昔は、その情報のひとつひとつが独立して、電車の壁にずらりと並んで、英会話を学ぼうと、ダイエツトを、健康になるうとか、そういう前向きな雰囲気、そのメッセー、それら、子ども、そこ、英会話は、あくまで、

を学ぼう」「健康になる」と、各々が独立した主張をしているように見えていました。

(中略)

ただ、私は少しづつ、気付けていきました。一見、独立しているように見えていたメッセーは、そうでなかった。というところに、世の中が溢れている情報は、合流を繰り返しながら、大きな海を成すように、この世界全体が、この間に設定している大きなゴールへと収斂されていくことに、その「大きなゴール」というものを端的に表現すると、「明日死なないこと」です。目に入ってくる情報のほとんどは、最終的にはそのゴールに辿り着くための足場です。この文を読みながら、お参り先でのご門徒との

やり取りを思い出す。

そのご門徒はある法座で、「どうすれば死を恐れずに生きていけるか」、おおよそのように投げかけられた質問に、どう答えていいのか分からず、その場を静観していたが、他のご門徒は皆、同一に答えたという。その答えは「もっと自覚を持つて浄土真宗のみ教えのお聴聞をすること」。

そうだと良いのだが。親鸞聖人(以下、宗祖)は、弟子の唯円による聞書「歎異抄」の第九条に、念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことに候ふやらんと、申し候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじこ

ころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべきことをおさへて、よろこばざるは煩惱の所為なり。

この意味は、「念仏しておりまして、おどりがあがるような喜びの心がそれほど湧いてきませんし、また少しでもはやく浄土に往生したいという心もおこってこないのは、どのように考えたらよいのでしょうかとお尋ねしたところ、次のように仰せになりました。この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりがあがるほど大喜びするはずのことが喜ばないから、ますます往生は間違いないと思うので

す。喜ぶはずの心が抑えられて喜ばないのは、煩惱のしわざなのです」、ということである。

人間もとより動物は、生理的に未体験の事柄を恐れる傾向にある。「生まれる」ということは、この世に誕生した時に、一番最初に体験することであり、「生きる」ということは、誕生より現在に至るまで体験中である。しかし「死ぬ」ということは、現在において誰もが未体験の事柄である。実際に生の対極にある死に瀕することは、たとえ教えを真剣にお聴聞していたとしても、煩惱が体を支配する生物の本能としての拒絶はなす術がない。

死の先に、「小さな河川が合流を繰り返しながら大きな海を成すように」、新たに生まれ、救われていく世界（お浄土）が、阿弥陀さまによって用意されている。また阿弥陀さまによる私たちが推し量ることのできない大きなはたらき（南無阿弥陀仏）は、私たちを確実に仏とすること、救うことを約束される。お経に示される阿弥陀さまの真実のご教示は、生きる上での大きな信頼感となり、また生きづらい世の中を歩いていく上での大きな励みとなる。

生きる上で、抗うことのできない未体験の死を、明確に意識しながら生きる動物は人間だけだという。冒頭の朝井リヨウ氏の文のよ

うに、私たちの生きる社会は、「明日死なないこと」ということで必然として構成している。

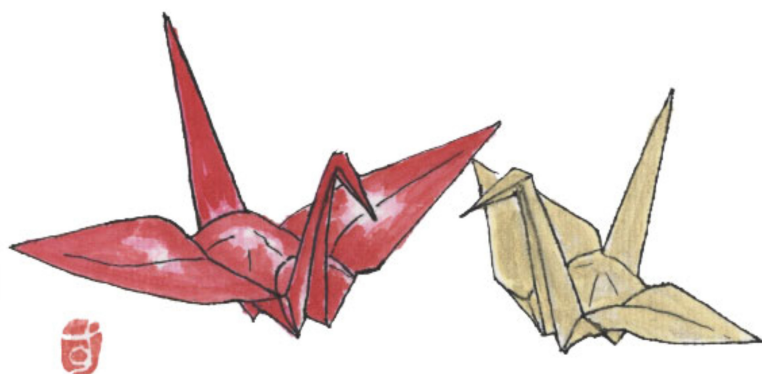
今年、人流の緩和によって、寺社仏閣への初詣で賑わうだろう。新たな年を迎えて、自らの穢れを神仏に祓い清めていただくと同時に、新たな年がよい年になるよう、どうか一年間大きな災難にあうことなく無事過ごせますように、と願い祈るのが大半であろう。しかし、浄土真宗でいう願いや祈りとは、神仏に何か利己的なことをを請い願うのではなくて、南無阿弥陀仏というはたらきに、親が我が子を抱きとめるように、常に生きる上での安心感を与えられることや、仏さまからいただく信心（信じる心）によって救うことを約束されることに、お念仏をいただいて感謝するということである。

「一寸先は闇」という言葉、世間では悪い意味での慣用句として使われるが、作家の五木寛之氏は悪い言葉ではないという。明日、

明後日のことよりも、生かされているこの日、この時、この一瞬、お念仏をいただく今を大切に無事に過ごす私の今年のイチオシの慣用語としたい。

参考

「正欲」 朝井リョウ 新潮社
「読売新聞」



挿絵 内村 壽美子

坊守 佐々木 ひろみ

あけましておめでとうござ
います
昨年は大変お世話になりました
本年もよろしくお願いいた
します

今日の新規感染者数は〇
千人という報道、それを聞
いて「多いなあ」というつ
ぶやきを繰り返す毎日に慣
れてしまったこの頃。それ
でも、緊急事態宣言などで
制限されることなく、人の
流れは少しずつ復活しつつ
あります。矢掛町では、昨
年、三年ぶりに大行列も
行われました。息子は、矢
掛放送で見たことのある
「下にく下にく」という声
と歩き方を真似て、大名列
にあこがれていました。の
で、初めて見られると知っ
たときは大喜びでした。当

日は、「昔の人に会える？」
「下にく下にくが聞こえて
きたよ！早く行かなきゃ！」
と大はしゃぎでした。家に
帰ると、行列の人がしてい
た動きを、できるようにな
りたてのケンケンで「ほら
見て見て！」と真似ていま
した。初めて見られたこと
がとてもうれしかったよう
です。いつも寺報では、息
子の話題を書かせてもらう
ことが多く、恐縮ですが、
行動範囲の狭い生活をして
いますので、お許しくださ
い。休みの日は、専ら近所
の公園へ出かけます。息子
は、とにかく誰かと一緒に
遊びたいので、公園に着く
やいなや、初めましての友
達にすぐに声をかけます。
先日は、同じぐらいの歳の
友達を見つけて、「ねえ、
一緒に鬼ごっこしよう！」
と誘いました。いいよ、と
言ってもらうと、「じゃあ、
一緒に逃げよう！」と手を

つないで行ってしまいまし
た。「えっ？鬼は？何から
逃げるの？」と私は心の
中でつつこみながら、思わ
ず笑ってしまいました。何
だか心和むひとときでした。
今、この時期にたくさんの
ものを見て、いろいろな経
験をさせてやりたいと切に
思います。
専教寺では、昨年も法要
の門信徒参拝は中止しまし
た。緩和の流れで、するべ
きかとも一瞬考えましたが、
いや、密になった本堂で、
多くの人が声を出したり、
お齋をいただいたりする・・・
皆さんの安全を考えると、
やはりまだ無理だな。とい
う結論に至りました。お寺
に集まりたい、皆さんと会
いたい、という声を聞くこ
とがあります。私たちもそ
う思っています。皆さんが
安心してお寺で一緒にお参
りできる日が早く来ること
を願っております。



多人数で集まることは、まだできませんが、不定期に総代会を開いて、門徒総代の方々にお寺の運営に関わる協議や、墓地参道の草取り、境内池の清掃などをしていただきました。仏教婦人会の役員さんには、寺報の発送作業をお手伝いいただいています。

専教寺を支えてくださっている皆様に改めて感謝申し上げます。

新年あけましておめでとうございます

旧年中はお世話になりました

今年もよろしくお願い申し上げます

門信徒総代
仏教婦人会 一同

一乗山 専教寺

専教寺からのお知らせ

令和5年度の当面の行事について、前年度と同様に新型コロナウイルス感染症の感染拡大、クラスター発生防止のため、門信徒の参拝を見合わせる予定です。コロナ禍の状況が好転した場合、あらためて今年度の行事予定をお知らせいたします。

